金剛経と少太山の教判思想

——円仏教はいかなる宗教であるか——

柳　炳　徳

一　少太山と金剛経

円仏教を唱導した少太山（朴重彬・一八九一～一九四三）は、金羅南道霊光郡白岫面吉龍里永村という韓国のまずしい農村で、父朴晦傾と母劉定天の三男として生まれた。少太山の生まれた當時の韓国の運命は、日本の植民地に転落するなど、大転換の極限状況下に置かれていた。そうした社会状況下で少太山は、二十余年間の求道の末、一九一六年三月二六日（陰）、二六才の青年として自修大覚[1]の慶びを抱き、孤高に立ちあがった。

少太山は、大覚の眼で、当時韓国が転落した根本原因とその回生の原理を照明した。その原因は、精神世界の堕落であり、これの回生の方法は、「真理的宗教の信仰」と「事実的道徳の訓練」にあると診断したのである。彼はまた、大転換の危機は韓国のみならず、世界的な状況と見、「波瀾苦海にあえぐ一切の生霊を広大無量なる楽園に導く[2]」ことを闡明した。それが円仏教を開いた動機である。

円仏教は法身仏信仰をうちだす。それを一円相の真理、即ち「○」と象徴し、信仰の対象、修行の標本と定めた。少太山は、「天下の人がだれも行うことのできる道は天下の大道であり、小数人だけ行いうる道は小道である。今われわれの教えようとする一円相の真理と四恩四要、三学八条は[3]、天下の人びとが必ず知るべき道であり、だれでも行うべき道であるので、天下の大道と言える[4]」と言った。

少太山は、自修大覚の後、諸宗教の経典を悉く閲覧したが、夢で見た『金剛経[5]』を得て一読した。彼はその感知でいう。「釈迦牟尼仏は、実に聖人の中の聖人である。……私は師匠の指導も受けず、自ら道を悟ったのであるが、その発心した動機から道を悟るまでの歩みを辿って見れば、昔の仏様の行道とその教えに相応しいところがある。それゆえに、私

の悟った境地の淵源を釈尊に求える」といい、また「私が将来、会上（教団）を開く場合にも必ず仏法を主体にして、完全無欠なる会上をこの世に新たに建設しうる。[6]」と言った。

少太山の覚魂が仏法に出会ってから、彼は完全無欠な大会上を公開すると宣言した。その根拠としている『金剛経』は、はたして少太山によっていかに見えたのか。少太山は『金剛経』と代表される仏法の要旨を次の四つに要約している。「仏法は天下の九道であって、真の性品の原理を明かし、生死の大事を解決し、因果の理致をあらわし、修行の道をとのえている。それゆえ仏法は諸教法の中で優れたところがある。[7]」といった。

二　新仏教と『仏教正典』

少太山が最初に組て立てた創造集団の名称は「貯蓄組合[8]」であった。この名は、さらに一九二〇年十月に「仏法研究会期成組合」と改称した。これから少太山が導く会上は、結局仏法を根本とする運動集団であることをうちだしたのである。[9]一九二四年二月には、またさらに「仏法研究会」と名示して、その後教名として一九四五年民族解放を迎えるまで続き、ようやく一九四六年に「円仏教」という教名が定められた。この「仏法研究会」時代に出された少太山の著述が数多くあるが、これらの中で、少太山が仏教をどう受容したかをよくあらわしているものとして三冊があげられる。一九二七年に発刊された『仏法研究会規約[10]』、一九三五年の『朝鮮仏教革新論[11]』、そして一九四三年発刊された『仏教正典』がそれである。

仏教関連の代表的な三部作が、「仏法研究会期成組合」の教体宣言から偶然にも各々八年の間隔を置いて公表されているが、その間にも絶えず数多い著述を出している。制度や体制を新しく模索した『仏法研究会統治組団規約』、会員たちの必読教義書としての『修養研究論』・『宝経六大要領』・『宝経三大要領』、儀礼集の『礼典』、そして修行集の『仏法研究会勤行法』などが出された。なお、機関誌の『月末通信』・『会報[12]』が日本警察の厳しい取締りの中で刊行し続けられた。ここに少太山の創造意志を歴史的な作業として昇華させた少太山の宗教運動の一面が窺える。少太山の著した初期教書の中でも、特に完成品と言える『仏教正典[13]』は、一九四〇年三月に草稿を書き始め、まる三年かかって完成させたもので、少太山の入寂（一九四三）以降、一九六一年までの円仏教の所依経典として使われてきた。その内容は全三巻で、第一巻は少太山の独特な見方による撰述で「改善篇」「教義篇」「修行篇」となっている。第二巻には「金剛経」「般若心経」「四十二章経」「仏説罪福報応経」「仏説賢者五福徳経」「仏説業報差別経」などの仏典を収録し、第三巻には「修心訣」

「牧牛十図頌」「休休庵坐禅文」「疑頭要目（禅家の公案）」など、祖師語録をのせている。

『仏教正典』第一巻は、少太山が独創的な大覚の枠をもって仏教の核心的な真理を収斂し、新時代の新しい宗教として救済理念を提示したものである。それゆえ、後人は少太山の教法を「万人の済度できる大経大法であり、千如来万菩薩の輩出できる場である」[14]と見た。少太山は仏法の時代化・生活化・大衆化による革新教法の性格を明らかにする。それゆえ、ただ仏教に限らず、今後の世界における宗教の新しい役割への念願が、『仏教正典』第一巻に強くうちだされている。

『仏教正典』第二・巻三には、伝来仏典の中で、ただ十篇を収録している。少太山は、「八万大蔵経」という数多い経典の中で、なぜ、またいかなる基準から十篇の仏典を収録したのか。その理由は次の三つに整理できると思う。①般若の空道理を仏陀精神の根本と見た点、②大衆教化のために因果信仰を確立しなければならないという点、③信者たちは外的に信仰の対象に頼ることだけでは円満な宗教と言い難く、内的に真理に立った自己修練を通じ精神主体を確立しなければならないという点である。[15]

三　少太山の教判思想

少太山の『金剛経』との出会いについては前述したが、少太山の見た『金剛経』とその究極的な意味把握は、円仏教の解釈学者たちにとって非常に重要な課題である。それには、まず二つの問題が解明されねばならないと思う。

第一、「八万大蔵経」と称される伝来の数多い仏典の中で、『金剛経』の位相はいかなるものであるか。第二、須菩提との問答を通じて展開されている金剛経思想は、いかなる特色をもっているのか。前者を教判論から見た『金剛経』の位置といえば、後者を金剛経思想の解釈学的展開といえる。

韓国での『金剛経』の流行は、高麗期知訥（普照国師、一一五八―一二一〇）の講、朝鮮朝己和（涵虚大師、一三七六―一四三三）の『金剛経五家解』説誼刊行が好例である。己和は『金剛剛経』の本旨について、「世人が自性を悟らなかったため、自性法を立てるが、しかし真如本体を悟れば皆その中にあり、自性を実見実行する時、真の金剛経があらわれ、般若による到彼岸（雑生滅義）の功徳があらわれる」[16]という。また、彼は『金剛経』の道理は般若不可得空の理念を実践する教えで、「無相をもって宗とし、無住をもって体とし、妙有をもって用とする教説である。」[17]と明かす。以降、『金剛経』は、韓国仏教において大乗思想の基本的理念を提示する役割をはたす代表的な経典の一つとして信奉されたといえる。少太山の『金剛経』の重視も本質的にこうした思想の流れを受けついだものと見てよかろう。

少太山は、前述のように『金剛経』を通じて仏法の偉大さを認め、それを四つに分けて語った。①「真の性品の原理を明かした」と見たことは、『金剛経』の主体思想の「般若不可得空の道理」と少太山の悟った性品の本来面目とが一致したことをあらわすものである。②「生死の大事を解決した」と見たことは、如実知見を体とし任運騰騰する『金剛経』の真理と少太山の生死一如した覚魂とが相通する点をあらわすものである。③「因果の理致をあらわした」と見たことは、『金剛経』の「応無所住」とか「無住於相」の宗趣から見ると、その宗顕の基底には因果の理致が必然的に作用していることを意味する。④「修行の道をととのえた」と見たことは、少太山の特徴的な見解といえる。仏法が優れているといえども、その法の法なるために、断惑の修行がなければならないと見たからである。

「教判」[18]とは、仏教々理の生達過程で、その理念の実践を段階的に意味付ける一種の範疇論である。そこで必然発生的に宗派が生じその宗派の宗祖を中心とする思想を展開することによって、自家尊高の優越性を語る。とくに中国仏教の展開過程において白派の優越性をあらわす手段として著しい進展であらわした。

こうした従来の教相判釈は、①時による区分、②形式による区分、③時・処・人による形式区分、④価値基準からの教理深浅の区分など四種に分けることができる。さらにこれを整理すると、③と④との二種に要約できよう。この中で教理の深浅を論ずと④型は自家尊高の価値観のため真の教判といえず[19]、社会性・時代性・民衆性をあらわす③型こそ真の教判といえる[20]。

このように見てくると、円仏教の出発の基盤を提示した金剛経思想は、これをさらに教判的に展開しなければならないと思う。少太山はなぜ金剛経道理を仏法の基本と見たのか。教判成立の立場から見れば、真の仏教の教えを『金剛経』から求めた少太山は、次のような見方をあきらかにする。①すべての根本教理は般若智（Prajūnya）を通じて成り立つ。②大小乗の諸教法は覚心をもって教え、「不可得空の道理」を体験することである。③すべての教法は多種多様であるが、般若の最終一道によって会通される、ということである。

少太山の覚魂によって出会った「金剛経道理」とは、結局般若の体験にあり、それゆえ少太山は修行を強調したに違いない。もしそうでなければ、それはまさに竜樹が『中論』讃偈で指摘した「諸戯論」になり、非仏説に落ちてしまうと見たからである。

この般若智を諸仏教思想展開の地平と少太山は把握した。そして、この般若の体験を土台とすれば、仏教のみならずすべての宗教までも、今後人類の前に新しく展開できうると見

る。従って般若の体験こそ人間の源本的な思考であり、諸宗教の正体性（Identity）を回復する道である、と少太山は思ったようである。

すべての仏教的実践行、いやすべての宗教的体験は、その表現は各々異なるものの、究極は般若の具現であるとの論理に立っているのが、少太山の教判思想ではなかろうか。『金剛経』が般若の体験的実践を強調した点から少太山は、こうした教判思想を提起したのであり、これはすなわち人間の本来的宗教性を回復させるための窮極的関心（Ultimate Concern）の表現であったと考えられる。

四　少太山思想の展開

少太山の提起した円仏教思想の特徴の一端を教判論的に窺って見たが、こうした分析枠によってこれから展開すべきいくつかの問題があるように思う。①根本仏教思想の探究が要請される。梵語などによってインド思想、インド仏教において因果問題がいかに展開されているかを究明する作業である。②南方仏教、チベット仏教、漢文文化圏仏教などの比較研究によって、その共通点が何であり、各々の文化圏が育ててきた地域的特性が何であるかを把握することである。③伝統仏教、または伝統宗教は、大体上層社会、支配層社会を通じて受容され、次第に大衆化された。そこで上層の指導理念として役割した仏教と、その次に形成された民衆化の仏教とが、いかに対応しつつ、今日の時点で発展することができるかを考察することである。④少太山の悟った自内証の道とは金剛般若思想に通暁したことを意味するから、円仏教学者たちは『金剛経』を研究した基盤の上で、諸仏法に会通する宗教風土を造らなければならない。⑤少太山思想の展開は「三段転入の論理」[21]をもって把握すべく、⑥少太山の宗教性は空・円・正[22]を標準とした信仰主体性と、理・光・力をもって照明された信仰対象性とが合致された状態であることを明らかさなければならない。

従って、少太山の覚魂による教判思想は、向内的に見ると、般若智をもって照明された新しい仏法を志向するのであるが、向外的に見ると、宗派仏教の固執、進んでは宗教的ドグマを自ら克服していく教えであると総合できる。

1　「大覚」という表現は、少太山の当代、教団形成に参加した弟子たちによる成語である。宋奎著『仏法研究会創建史』から文字化されるが、仏陀の正覚とどういう風に区別して説明すべきか、新たを問題として提起される。

2　『正典』第一編、開教の動機（『円仏教全書』一九頁）

3　四恩は天地恩・父母恩・同胞恩・法律恩、四要は自力養成・智者本位・他子女教育・公道者崇拝、三学は精神修養・事理研究・作業取捨、八条は信・忿・疑・誠（進行四条）・不信・貪慾・懶・愚（捨掛四条）。

4　『大宗経』経義品二章（『全書』一一二頁）

5　少太山が『金剛経』を夢兆から得たという表現から、①当時、少太山がまったく仏教知識をもっていなかったこと、②仏教が韓国で長らく排斥されてきたにもかかわらず、民衆の間には、『金剛経』が篤く信奉されてきたことなどの状況が窺える。

6　『大宗経』序品二章（『全書』一〇七頁）

7　同上三章（『全書』一〇八頁）

8　一九一七年八月、少太山の故郷で八人の弟子を選んで組織した。虚礼廃止・迷信打破・禁酒断煙・遊休労働力開発（共同出役）などの運動に上って勤倹貯蓄し、ついに一九一九年自力で防堰工事を成就するに至った。

9　すべての記録に「仏法」の名を用い「これから我らが学ぶことも仏様の道徳であり、後進たちを教えることも仏様の道徳である。」（『円仏教教史』）と、少太山は宣言した。

10　仏法研究会刊。その内容は「本会の由来」「本会の趣旨説明」「本会の原則」などと構成された。

11　仏法研究会刊。その内容は、一過去朝鮮社会の仏法に対する見解、二、朝鮮僧侶の実生活、三、釈尊の智慧と能力、四、外邦の仏教を朝鮮の仏教に、五、小数人の仏教を大衆の仏教に、六、分裂された教化科目の統一化、七、等像仏崇拝を仏性一円相に、などと構成された。

12　『月末通信』は、一九二八年五月創刊され、月一回筆写配付された。『月末通信』（三五号）に引きつづいて『月報』（四七号まで）、そして一九三三年『会報』が発刊された。終戦後、今日の『円光』が創刊され、これを受けついだ。

13　『仏教正典』全三巻の中で、第一巻は修正補完され、一九七二年『正典』として独立刊行された。

14　大山宗法師著『正典大意』（円光社、一九八六）一七頁。

15　拙稿『円仏教の仏教観—少太山の仏教思想の受容に関する一考—』（崇山朴吉真博士古稀紀念『韓国近代宗教思想史』、一九八四、一一三七頁以下）参照。

16　『金剛経五家解』（月精寺刊、一九四〇）六頁。

17　同上

18　教相判釈の略称で、あらゆる観点から釈尊一代所説の教相的前後、深浅、優劣などを定め、これを諸経全体有機関係をもって整理する見方。（安藤俊雄著『天台学』五五頁、平楽寺書店、一九六八）

19　拙著『円仏教と韓国社会』（詩人社、一九八六）七九頁以下参照。

20　こうした教判観は元暁や円測の教判観とも相通する。元暁は「理心不然」「是就一途亦有道理」（『大慧度経宗要』、『大正蔵』三三、七三中）という。如何なる教えをもその状況によって適合する面があると見、いわゆる和諍論理を展開する。円測は「三時所説の教えは義の深浅広略の意味であり、年歳日月前後によって三時を説いていたのではない。」（『解深密経疏』、『大続蔵』三六、二九八左）という唯識教判を立てている。

21　三段転入は、①少太山の独創性（Etwas）→②仏法→③万宗教への順入逆入の解釈学である。（拙著、前掲書一四三頁以下）

22　同上拙著参照

〈キーワード〉　少太山の大覚、円仏教、仏教正典、金剛経道理

（韓国・円光大学校教授・哲博）